様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　5　月　9　日現在

機関番号：15401
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009　～　2011
課題番号：21520747
研究課題名（和文）アッティカ碑文の研究

研究課題名（英文）A Study of Attic Inscriptions

研究代表者
前野　弘志（MAENO HIROSHI）
広島大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：90253038

研究成果の概要（和文）：
①前 6 世紀から後 3 世紀までのアッティカ碑文（約 150 点）およびその建立場所の実見を通して、碑文と建立場所の関係を明らかにした。②碑文が製作される政治的機構やプロセスを明らかにした。③個々の碑文テキストの歴史的文脈を明らかにした。④史料集として出版するための準備をした。⑤碑文のメッセージが人びとにどのように伝達されたかを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
(1) By surveying around one hundred and fifty Attic inscriptions and the places where they were set up, the relationship between the inscriptions and their placement was made clear. (2) The process of producing the inscriptions by political institutions was traced. (3) The historical contexts of each inscription were revealed. (4) Publishing these results as a source book was prepared. (5) How messages of the inscriptions were conveyed was made clear.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：古代ギリシア・碑文・史料集

１．研究開始当初の背景

アッティカの碑文文化の諸相を明らかにするという本研究の着想は、研究代表者として獲得した研究課題「ポリスの統合と碑文文化」（平成 14 年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))、平成 14 年から 17 年まで、300 万円）の遂行前に得たものであった。その研究成果は科研報告書『ポリスの統合と碑文文化』（平成 18 年 8 月）にまとめた。同報告書は『アッティカの碑文文化　―政治・宗教・国家―』と改題し、出版助成金を得て広島大学出版会から 2007 年に出版された（600 頁）。

本書の目的は、主に前 6 世紀から後 3 世紀までのアッティカにおいて行われた、「碑文文化」の諸相を明らかにすることにある。従来、碑文はテキストとして読まれてきた。碑文学者および歴史家は、古代において碑文は

テキストとして読まれたと考え、また彼ら自身も碑文をそのようなものとして読んできた。つまり彼らにとっての最大の関心事は、碑文に書かれた内容であった。しかし本書は、碑文を単にテキストとしては捉えない。碑文を情報の乗り物の一つとして捉え、その乗り物の外観や存在の意味そしてそれが果たした社会的機能に関心を払う。かつては、碑文はテキストとして碑から剥ぎ取られて読まれてきたが、本書は剥ぎ取られたテキストを碑に貼り戻し、その碑を元の場所に立て直すことによって、本来、碑文に込められていたテキスト情報および非テキスト情報の総体を読み取ることに努める。考察の結果、以下の点が指摘された。①碑文を解剖すると、それはテキストのみならず、形、材質、場所、大きな文字、テオイ、レリーフ、製作費というパーツから構成されていることが判明した。②これら非テキスト要素の一つ一つは、テキストと同じように文法を持ち、多くの情報を発信していた。但し、その情報は、必ずしもテキスト情報を補足するものではなく、むしろそれとは関係のないものであることが多かった。つまり碑文には、テキストによって書き留められた公的記録のみならず、非テキストによって表現された、個人的な思惑、野心、名誉心、願い、祈りなどが、綯い交ぜになって込められていたのである。③碑文は二つの文脈において語られたことが判明した。すなわち「第一文脈」（碑文を作った側の固定的な文脈）と「第二文脈」（碑文を読んだ／見た側の恣意的な文脈）である。そして「第一文脈」と「第二文脈」の間には、重複、ズレ、ネジレ、断絶、欠如が観察された。つまり碑文は、単に情報を記録・伝達するためだけに活用されたのではなく、人々を説得するための道具として、人々に縛りをかけるための道具として、人々をあるべき方向へと導いて行くため（国家統合）の道具として語られ、活用されたのである。

本応募課題「アッティカ碑文の研究」と平成 14 年度の課題「ポリスの統合と碑文文化」とは、例えれば車の両輪のような関係にある。即ち「ポリスの統合と碑文文化」は、アッティカ碑文を解剖し、碑文を構成する諸要素を抽出して、その要素ごとに多量の碑文を切り分けて分析したものである。その結果、アッティカの碑文文化の横断的な諸相（数量分析、形態分析、材質分析、建立場所の分析、強調文字の分析、レリーフの分析、製作費の分析、碑文の製作方法に関する分析、碑文の語りに関する分析、碑文建立と民主政の関係に関する分析）が明らかとなった。しかし一方で、その縦断的な諸相（個々の碑文の総合的な分析）は、かえって見えづらくなってしまった。そこでその欠点を補うための研究が、本応募課題「アッティカ碑文の研究」である。個々の碑文に関する総合的な分析を補うことによってはじめて、アッティカ碑文を総合的に（横断的、縦断的に）分析することが可能となる。

２．研究の目的

本研究の目的は、前 6 世紀から後 3 世紀までのアッティカにおいて行われた碑文文化の諸相を、一つ一つの碑文史料に即して明らかにし、その成果を『アッティカ碑文史料撰』（仮）と題する史料集にまとめることにある。

本研究の射程は、墓碑碑文、奉納碑文、決議碑文、目録碑文、名簿碑文、その他の各分類分野から、内容的に重要でありまた保存状態のよいもの 150 程度を選択して、史料集にまとめることにある。この史料集は、パピルス文書の入門的史料集 P. W. Pestman, *The New Papyrological Primer*, E. J. Brill, Leiden / New York / Köln (1994)をモデルとする。この史料集は大きく二部から構成される。第一部はアッティカ碑文を解読する上で必須の項目に関する解説である。例えば、アッティカの政治史と時代区分、名祖アルコン表、カレンダー、度量衡、区、部族、民会、評議会、当番評議会、書記、その他の主要な役人などの項目である。第二部は史料集である。個々の史料には必ず写真を付す。タイトル、年代、摘要をまとめた見出しを設ける。必須項目は、碑文の発見年代と場所、建立場所とその意味、碑文の素材、寸法、外見の描写、レリーフがあればその描写と図像学的解釈、文字のサイズと形態、テキストとその試訳および注釈、その碑文の歴史学的、碑文学的意義に関する解説である。語彙については巻末にまとめる。

３．研究の方法

まず「データ編」は、碑文テキストを読む上での必須の知識を網羅し、適宜参照できるようにしたものである。もちろんこれらのデータは未知のものではなく、専門家ならある程度は常識的に知っているものではあるが、詳しい情報は様々な文献に散在しており、一つにまとめられたものはまだない。それに専門家といえども、個々の項目について、なんとなくは知っていても正確に理解している人は少ないのではないだろうか。それ故にこの「データ編」は、アッティカ碑文を本格的に解読するためには、必須のツールとなるはずである。その各項目は以下のものとなるだろう。

1) 時代区分

2) 市民団　①市民･女性･在留外人､②区、③部族、④民会、⑤評議会、⑥当番評議会、⑦書記、⑧名祖アルコン、⑨財務官、⑩その他の役人、⑪外人顕彰・市民顕彰

3) 宗教　①ギリシア宗教､②パンアテナイ

ア祭、③エレウシスの秘儀、④その他の神殿
4) カレンダー
5) 度量衡　①重量・長さ、②貨幣
6) 文字　①アッティカ方言、②文字形態、
7) その他

次に「史料編」は、アッティカ碑文の中から、150 点ほどを選び出したものである。これらの史料は、従来の史料集と異なり、必ずしも歴史史料として重要なものではなく、碑文文化を知る上で重要と思われるものである。

1) まず、墓碑碑文、奉納碑文、決議碑文、目録碑文、名簿碑文、その他の各分類分野から、内容的に重要でありまた保存状態のよいもの 150 点程度を選択する。

2) それぞれの碑文の写真を入手し、研究機関から写真の掲載許可を順次得ていく。

3) 可能な限り実物を実見するために、アテネ碑文博物館およびその他の博物館（ギリシア・トルコ）を訪れる。

4) それと同時に、テキストの校訂と編集を行い、試訳する。

5) 碑文史料集および当該碑文に関する論文などを調査して、碑文の発見年代と場所、建立場所とその意味、碑文の素材、寸法、外見の描写、レリーフがあればその描写と図像学的解釈、文字のサイズと形態、テキストとその試訳および注釈、その碑文の歴史学的、碑文学的意義に関する解説をつける。

４．研究成果

古代ギリシア語碑文史料集として主要なものとしては、1) *Inscriptiones Graecae IG*.I³[1981], *IG*.I²[1913]; 2)Tod, *A Selection of Greek Historical Inscriptions* vol.I [1933], vol.II [1948]; 3)Meiggs / Lewis, *A Selection of Greek Historical Inscriptions* [1969]; 4)Rhodes / Osborn, *Greek Historical Inscriptions* [2003]; 5) Guarducci, *Epigrafia Greca* Vol.1-4 [1967-78]などが挙げられる。これらのうち、1), 2), 3)は碑文の写真を全く掲載していない。4)は若干の碑文の写真を掲載している。5)は非常に多くの碑文の写真を掲載している。5)を除く史料集はいずれも、碑文の物理的な形状に関する情報は含んでいるものの、写真は掲載していない。その理由は、技術的経済的なものでもあろうが、それはまた碑文に関する研究動向を反映したものでもあったと言えるだろう。即ち従来の碑文学は、碑文をテキストとして捉え、碑文は掲示板のように読まれたと考えていたので、碑文の写真を掲載する必要性を強く感じなかったのである。しかし 1980 年代以後になると、碑文はシンボルであり、必ずしも読まれることを目的として刻まれたのではないと考えられるようになり、碑文の持つ諸機能の解明が課題となった（Thomas [1992], Steiner [1994], Rhodes[2001] etc)。それ故に、碑文の物理的状態を示す写真は非常に重要な資料と考えられるようになったのである。本研究課題では、従来のように碑文を文字史料としてのみ扱い、そこから歴史事象を読み取ることのみを行うのではなく、写真を駆使して、碑の形、大きさ、文字の大きさ、建立場所、レリーフなど、碑文の非文字情報に着目して、碑文をテキスト情報と非テキスト情報の総体として扱い、古代ギリシア、特にアッティカという地域において、碑文を石に刻んで立てるという文化の諸相（ここでは縦断的な諸相）を明らかにする。この点が本研究課題の大きな特徴であり、独創性である。また日本語で書かれた最初の本格的な碑文史料集となると言う意義もある。

また、本研究のもう一つの成果は、碑文文化という方法論を確立したことである。それは以下のようなものである。碑文をコミュニケーションのメディアとして捉える場合、当然のことながら、メディアとしての碑文を挟んでその両側にまず二種類の人間がいたはずである。つまり一方の側に①「メッセージの送り手」がいて、もう一方の側に②「メッセージの受け手」がいたのである。しかし、メッセージの受け手は自分が受け取ったメッセージを自分なりに加工して他人に再発信することもあるので、その場合、彼は③「二次的なメッセージの送り手」=「碑文の語り手」となる。メッセージの伝達はそれ以後果てしなく続いていくが、碑文の周辺には少なくとも以上の三種類の人間がいたことになる。

この点を考慮すれば、碑文をメディアとしたコミュニケーションの全体を捉えるためには以下の三種類の情報を扱わなければならないだろう。第一は A「碑文の文字情報」である。これは碑文を製作させた人間が誰かに伝えたいと思ったことをテキストという形式で表現し発信したメッセージである。従って、そこからは「メッセージの送り手」の意図を読み取ることが出来る。第二は B「碑文の非文字情報」である。これも碑文を製作させた人間が誰かに伝えたいと思ったことを碑の大きさ、形、材質、目立つ文字、装飾、場所の意味などの形式で表現し発信したメッセージである。従って、そこからも「メッセージの送り手」の意図を読み取ることが出来る。しかしここまでが碑文そのものの分析から得られる情報の限界である。つまり碑文そのものをいくら丹念に分析したとしても、送り手が発信したメッセージが受け手によってどのように受容されたのかという点に関しては、ほとんど何も分からないからである（もちろん碑文に対する破壊や修正の痕跡は、碑文に対する受け手の態度を知る重要な手がかりとなる)。従って「メッセージの受

け手」がメッセージをどのように受容したのか、また「二次的なメッセージの送り手」=「碑文の語り手」がメッセージをどのように加工して再発信したのかということを分析するためには、碑文そのものから離れて文献史料に散在する碑文をめぐるエピソード、つまりC「文献史料の碑文エピソード」を分析しなければならない。従って、碑文をメディアとしたコミュニケーションの研究は、以上の三種類の情報を総合的に扱ってはじめて成立するものと言えるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）
1. 前野弘志「ある碑文の歴史—いわゆるデルフィの蛇柱碑文の場合—」『史学研究』（広島史学研究会）272 号 2011 年 10 月 12 日 1-26 頁（査読有り）
2. Hiroshi Maeno, Historiography and Inscription in Ancient Greece: How were Inscriptions Narrated?, *The Journal of Greco-Roman Studies*, vol.44 (2011 Summer), p.79-109, The Korean Society of Greco-Roman Studies, Seoul, Korea（査読無）

〔学会発表〕（計　3 件）
1. 前野弘志「ある碑文の歴史—いわゆる蛇柱碑文の場合—」広島史学研究会 2010 年度大会（広島大学）平成 22 年 10 月 30 日
2. 前野弘志「アッティカの決議碑文を読み直す−国家の歴史から個人の歴史へ−」中国四国歴史学地理学協会 2010 年度大会（福山大学）平成 22 年 6 月 27 日
3. 前野弘志「碑文の解説者　—古代ギリシアにおける観光ガイドと神官—」中国四国歴史学地理学協会 2009 年度大会（愛媛大学）平成 21 年 7 月 5 日

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
前野　弘志（Maeno Hiroshi）
広島大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：90253038

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：